

言語学習と言語態度

人がことばをはなしている。ただ、それだけのことで、だれが、どんなことばをはなしているかによって、他者からうけるまなざしはおおきく変化する。

ある人たちのことばは「〇〇語」という名前がついている。またべつの人たちのことばは「〇〇方言」といわれる。なかには、自分たちがはなしていることばに否定的な名前(あだ名)をつけられることもある。名前だけをみても、世界中のことばが平等ではないことに気づく。その現実のなかで、人は自分の言語をはなしたり、ほかの言語を学んだりしている。今回は、第二言語として言語を学ぶということについて考える。

在日朝鮮人が韓国に旅行に行くとき、「在日同胞」であるといえば朝鮮語(韓国語)がそれほどできないことでイヤな目にあうこともある。とくに説明せずに日本人ということにしておくと「ウリマル(われわれのことば)がわかるの?」とよるこんでもらえる。このような経験談をししばしば耳にする。「できて当然」と意識があれば、要求水準は高くなる。一方で、「できないのがふつう」という意識があれば、すこしの会話力であっても、よるこばれることがある。

わたしは2002年から2年間、韓国の大学院に留学した。初対面の人からは、おきまりのように「なんで韓国に留学したんですか」と質問された。そして「韓国語じょうずですね」と、ほめられつづけた。日本から韓国に留学すれば、ほぼ確実に歓迎され、よるこばれる。たのしい生活をおくることができる。

はたして、韓国から日本に留学してきている人はどうだろうか。また現在、韓国の「雇用許可制」のもとで工場などで仕事をしている外国人労働者は、ことばができる／できないことでどのような経験をしているのだろうか。両者の関係が社会的にどのような状況にあるのかによって、態度は友好的になったり、否定的になったりする。だれが何語を学ぶのかによって、周囲の反応はちがってくるということだ。

言語学の研究者がある言語を研究するとしても、ある場合には歓迎され、ある場合には警戒され、スパイと誤認されることもある。その国の少数言語を研究していることで入国禁止措置をうけることもある。

言語態度と言語学習

大学入試をひかえて、どの大学のどの学部に入学するかを考えると、ある人は「外国語学部〇〇語学科」をえらぶ。本人なりの理由があって、志望するのである。しかし、周囲の心ない発言にさらされる場合もある。「〇〇語なんて勉強してどうするの?」「なんで〇〇学科なんかに?」などと、一方的で差別的な価値観で非難めいた質問をあびせられることもある。

それは、多くの人が、経済的な価値を見いだせるかどうかで、何語を学習するのかを決定しているからである。就職に役立つかどうかを基準にする人も多い。これは世界的な傾向としてあり、大言語を身につけることが教育の第一目標になってしまっていることもある。そこで学校は第一言語喪失のステージとなる。言語が序列化した世界において、人は大言語を「自主的に」学ぼうとする。構造的な言語差別が大言語学習と第一言語の喪失をうみだしている。

そして「〇〇語を学ぶのは当然のこと、□□語を学ぶのは無意味なこと」というような意識が定着していく。

しかし、「世界観をひろげる」「人生のひきだしをふやす」という点だけをとって、あらゆる言語学習には意義があるといえるのではないだろうか。

「ありがたられ効果」ヤマダ カント

人とちがうことをすれば、めずらしがられる。さらに、大言語話者が小言語話者を学ぶときには、「ありがたられる」。そのような現象について、ヤマダ カントは「ありがたられ効果」という用語をつくって説明している(ヤマダ 2001)。

ヤマダは大言語話者が小言語を学ぶと、意外に思われたり奇人な人だと思われること、小言語話者に「感謝の気持ち」をもたせたり、大言語話者に自負心をもたせたりすることを指摘している。そのため、大言語話者は「快適な気分

で小言語を使用することができるようになる」という(同上:102)。その快適さとは、「大言語と小言語の間に存在する格差」によって生じるものである(同上:103)。ヤマダはつぎのように、大言語話者と小言語話者の関係の非対称性を説明している。

大言語話者が小言語を学習／教育／研究すると、小言語話者から高い評価を受けたり、ありがたがられることが多い…中略…。この「ありがたがられ効果」が存在するために、大言語話者は小言語を学べば高い評価を受けることができ、学ばなくても非難を受けることがない。まさに小言語話者が大言語をおしつけられる際のダブルバインド(学んでも低い評価を受ける場合が多く、学ばなければ評価さえされない)の逆方向版である(同上)。

社会のなかで、バイリンガルにならざるをえない人たちがいる。その一方で、バイリンガルにならなくても社会生活に支障がない人たちもいる。そこには関係の非対称性がある。その非対称性は、言語学習への態度においても観察できるということだ。構造的な差別があり、そのなかで個々の言語行動がある。その言語行動は権力の磁場から自由ではありえないということである。

「英語は誰のものか」ダグラス・ラミス

英会話教室など、英語を学ぶことを推奨するような広告では、英語ができれば世界中の人と会話できるというふうアピールされている。魅力を宣伝することで、やる気にさせようとしている。しかし現実には、世界中で英語が使用されているとはいいがたい。現に各地で使用されている英語にしても、発音や用法にさまざまな地域差がある。そのため、「World Englishes」「The English Languages」(トム・マッカーサー『英語系諸言語』の原題)のように英語を複数形で表現することがある。

もし、「世界」を強調するのであれば、そこでの英語学習は多様な地域のバリエーションを学ぶのが当然であるはずだ。しかし、多くの場合、英会話教室の広告で使用されているのは、「白人」の写真である。その広告からは世界が見えてこない。見えるのは「英米」、もしくは「アメリカ」である。ダグラス・ラミスはそのような現象を観察して、日本という「英会話」は人種差別的であると指摘している(ラミス1976:22-23)。英米にしても白人の国ではないことを考えれば、まっとうな指摘であるといえる。

ラミスは、「英語は誰のものか」というエッセイでつぎのようにのべている。

…英語は英米人の財産であるという考え方が一般にはひじょうに強い。が、そのように考えてしまうと、英語をほんとうに自分のものにするのがむずかしくなると思う(ラミス1982:90)。

そして、つぎのようにのべている。

…外国語を勉強していると、しばしばことばに抑圧されるという現象がおきる。いろいろ工夫してもつらいことが多い。それは私が、日本語を習った経験からも言えることである。しかしそのかわり、外国語を勉強する人には、いくつかの権利があると思う。

なまりで話してもいい権利。

ことばは通じればいいのであり、言いたいことを伝えるためにことばを学ぶのだから、言いたいことが相手に伝わる程度の発音で良い。それ以上に正確な発音はいらないのである。…中略…

まったくおかしくない英語で話さなくてもいい権利。

…もちろん英語の先生には、できるだけ正しい英語を教える義務があるので正しい英語を覚えるべきだが、それは別として、ただ人と話したいために勉強している人ならば、意味が伝わればその文章は成功だったと思ってほしいのである。入学試験では×になるかも知れないが、話しているときは○×は関係ないのだから。

ことばで遊ぶ権利。

…あることばが分らない場合、まわり道を通して表現する方法がある。比喩やイメージや比較などを使って、「……のようなものである」という言い方である。…中略…

たとえば、私の友人は、「ひげそり」ということばが出てこなかったので、「ひげを切る葉っぱのようなものをください」と言ったところ、店の人は笑って、すぐにそれを理解してくれたと言っていた。もちろん、正確なことばを分るようになれば、こんなことは言えなくなるわけで、こうした英語による〈遊び〉は、シロウトだからこそできる特権だと思う(同上:91-92)。

言語を学び、身につけていく段階において、すでに身につけたものを「自分のもの」と考えてもいいのではないかということである。他者のものだと考えるから、びくびくして相手の顔をうかがうような態度をとってしまう。

言語学には「母語の干渉」という用語がある。第二言語を使用する際に、第一言語（母語）の影響がでることをいう。発音を聞きわけることにも母語の制約をうける。発音することにも母語の制約をうける。文法の用法にも、母語の影響をうける。それは当然のことである。母語の干渉を完全になくすことは無理なことだとあらかじめしまったほうが気が楽になることもあるだろう。母語の干渉がでることは、バイリンガルの証拠であるといえる。すくなくとも、モノリンガルの第一言語話者に指さされるようなことではない。

なお、母語の知識が第二言語に応用できることもあるため、「正の言語転移」、「負の言語転移」というとらえかたがされるようになっている。

「聞き手の国際化」土岐哲（とき・さとし）

日本語と英語を対比すれば、日本語は小言語である。しかし、ほかの言語と対比すれば、日本語は大言語である。言語の権力は相対的なものである。1990年前後、日本が経済的に豊かになるなかで「日本語の国際化」がさげられるようになった。さまざまな本や雑誌で「日本語の国際化」が議論された。海外での日本語教育を拡大すること、日本への留学生をふやすことなど、さまざまな「戦略」が論じられた。日本語を大言語にするということである。

一方で、日本語の国際化という議論では、日本語の学習において障壁になるものがあることが指摘され、日本語のありかたをどのように改善するかが議論されることもあった。あるいは、日本語話者の態度について反省的に議論することもあった。

ここでは土岐哲による「聞き手の国際化」という議論をとりあげる。土岐は「日本語の国際化などという前に、よくよく考えておかなければならないこと」として「聞き手の国際化」をあげ、つぎのようにのべている。

日本語が国際化するということは、それだけ聞こえが異なるタイプの日本語をあれこれ耳にすることになるであろう。いろいろな日本語を聞いて、それなりに偏見なく理解し、評価できるようになるためには、日本語の使い手に対して、時間をかけて、しなやかな意識に変えるような働きかけが要るはずであるが、今のところ、実現には程遠い感がある（とき1994:74）。

土岐はつぎのような具体例をあげている。

日本の大手自動車会社の工場長がタイからの技術研修生に会った時、「わたし…じどうチャ…」などと話しているのを聞いて、引率の日本人に「この人達は本当に仕事ができるのか」と心配そうに言ったというが、これなどは、「わたし」や「じどうチャ」などという発音の仕方が、日本語では幼児の話し方に似ているところから、勝手に人格や能力の判断にまで結び付けて出された反応であったとまずは解釈できよう。

これらの問題は、なにも外国人日本語学習者だけに関わる問題ではない。外国人に対する以前に、日本人同士の意識の問題としてもきちんと考え、解決しておくべき根深い問題である（同上:78）。

土岐は議論のしめくくりとして「公平な耳社会の実現」をかかげている（同上:80）。公平な耳とは、ことばのバリエーションに対して公平な言語態度をとるということである。言語を「自分たちのもの」と考えるから、「他者」と見なした相手の発音に尊大で攻撃的な態度をとってしまうのである。他者化するための表現として、「外国人」の日本語の発音をわざとカタカナ表記することもある。これも、やめるべき風習であるといえよう。

今回は災害によってあきらかになったことばのバリエーションと言語態度についてとりあげる。

参考文献

木村護郎クリストフ（きむら・ごろう くりすとふ）編 2016 『節英のすすめ—脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ』 萬書房

久保田竜子（くぼた・りゅうこ） 2018 『英語教育幻想』 ちくま新書

土岐哲（とき・さとし） 1994 「聞き手の国際化」 『日本語学』 12月号（特集「日本語の国際化」）、74-80

丹羽牧代（にわ・まきよ）編 2019 『母語干渉とうまくつきあおう—英語を教える人に 英語を学ぶ人に』彩流社
マッカーサー、トム（牧野武彦監訳）2009 『英語系諸言語』三省堂
ヤマダ カント 2001 「大言語話者による小言語学習／教育／研究の陥奔—「ありがたがられ効果」という用語の提案」
『社会言語学』1号、101-103
ラムス、ダグラス（斎藤靖子ほか訳）1976 『イデオロギーとしての英会話』晶文社
ラムス、C ダグラス（家地永都子ほか訳）1982 『影の学問、窓の学問』晶文社

学生のコメント

…外国人の子どもが義務教育対象でなかったら、学費なども全て自己負担なのか気になった。

【あべのコメント：外国人は義務教育の対象としないということの根拠は日本国憲法ですが、憲法よりも重視されるべき規範として国際条約があり、たとえば日本は国際人権規約や子どもの権利条約を批准しているので、学費の自己負担はないです。まだそういった国際条約に批准していない時代の1953年には「義務教育無償の原則は適用されない」という通達をだしていたとのことですが、実際に徴収したことはないそうです（田中宏2013「朝鮮学校の戦後史と高校無償化」『〈教育と社会〉研究』23号）。外国人の就学については、権利ではないが、恩恵としてみとめるという立場をとっていたということです。】

…私は小学生の時に大阪から静岡に引越しました。そのころはもちろん関西弁しかしゃべれませんでした。初めて学校に行った時「大阪弁をしゃべってよ！」と言われて逆にプレッシャーを感じたり、周りが静岡の方言をしゃべる中自分は大阪弁しか話せず周りと浮いてしまっていると感じたりしました。そのような体験から、私は周りとなじむために標準語で話し、静岡の言葉を早く覚えようと必死になりました。もちろん今は静岡の言葉も話せますし、関西弁も話せますがどっちも中途半端な状態で、たまに分からない方言が出てきます。また9月に京都にインターンに行ったとき関西弁をしゃべったら「関西のなまりが入っている」と言われてショックでした。幼いころは考えてもいませんでしたが、今考えてみると私のアイデンティティーの1つの中に「関西弁」があったのかもしれない。周りとなじむために小学生の私が自分のアイデンティティーを捨ててしまったことを今の私は少し後悔している節があります。…後略…

【あべのコメント：自分のことばが変化していくことは当然あることで、たとえイヤな体験をいっさいしたことがなくても、周囲のことばになじんでいくものです。わたしは京都のことばをしゃべりたいと思ったことがあるわけではないのに、「いかはりますか」のようないいかたをいつのまにかするようにもなりました。ことばのひきだしが複数あるのは当然のことです。そのときどきで、つかいわけできたらいいですね。】

ロールモデルの重要性に関することとして、私の同級生にフィリピンの子で文部科学大臣賞を受賞し、大学に進学した子がいます。その子は育ててくれた地元で恩返しをしたい！という思いから地元の名産品を紹介する活動を行い、それが認められ、文部科学大臣賞を受賞していました。また、私の住んでいる学区は外国籍の人が多く、学校にも外国籍の児童が多いのですが、そのように外国籍児童が多いような学校で彼は講演も行なっているそうです。ロールモデルの話聞いて、まさに彼がそうだなと思いました。彼のように積極的に自ら発信していくようなロールモデルが増えれば、外国籍児童が将来を肯定的に考えることができるのになと思いました。

【台風前の交通機関の案内表示について】うちの地元の駅は電光掲示板がなく、ホワイトボードに日本語で書かれていました。一応、中国語や韓国語で○日～○日まで影響ありと書かれたプリントは貼ってありました。（名古屋鉄道）…後略…

先日、弟の通う中学の便りをたまたま見た時、すべての漢字にふりがながふられていました。中学生ならこんなの読めるでしょう、と思っていましたが、それは日本語を母語としない生徒やその親への配慮だったと気がきました。

…最近日本語関係の論文を探す際、あべ先生のようにひらがな表記の筆者を見ると読もうと思うようになりました。まさしく言語態度が、目に見える形で表明されているからです。

学力の問題には2つの捉え方があると考えられる。1つは障がいや言語をうまく話せないことなどによってテストがうまくできず、失点してしまうことも込みで学力とみなすこと。もう1つはそれらのハンディキャップを抜きにすれば彼、彼

女らはもっと点を取れるはずだから本当の学力はもっと高いはずだと考えること。どちらが正しいかはその学力テストの目的がどこにあるのかに委ねられる。

私はネイティブ・アメリカンの友人がいるが、差別や貧困から悪循環が生まれてしまう状況を教えてもらったことがある。今でも偏見や差別がある中で、居住区に住む人々は特に貧困や健康状態の悪い環境に陥ることが多いという。お酒やドラッグに逃げてしまったり、祖先から伝わる抑圧の歴史や今も続く差別から、自己肯定感が低くなってしまったりと悪循環が生まれる。差別など社会の問題が人々に与える影響はとても大きいことを知った。／日本人は英語という外国語をカンペキに話せなくてはいけないというプレッシャーが大きいから、多国籍の人の日本語能力のハードルも上げてしまうのではないか。私は小1で外国に移住した日本人の友人がいるが、彼はひらがなしか読み書きできず、メールの文章がすべてひらがなで書かれていたとき、読みづらく、少し抵抗があったことを思い出した。←わかち書きがないからこそ、読みにくかったのかと気づいた。

…大学入試のセンター試験で、外国語科目の中で英語の他にドイツ語やフランス語、中国語が選択できるようになっていますが、これはどういった配慮なのでしょう。外国籍の子どもへの配慮ならば、他の科目での対応（国、数、理、社科目も多言語表記にする等）があると良いと思うのですが…違和感を感じます。

【あべのコメント：配慮ではないです。そもそも日本の学校教育では外国語教育を実施することになってはいますが、英語でなければいけないということはないのです（けれども、事実上の必須科目となっている）。ただ、中学高校で英語にくわえてほかの言語の授業をうけている人もいます。なのでセンター試験の外国語も選択制になっている。けれども、センター試験では圧倒的多数が英語を選択するし、そのレベルはピンキリなので平均点はそれほど高くなりません。しかし、英語以外の外国語科目は各言語、100人前後くらいしか受験しません。かなりできる人だけが選択する。なので平均点があがる。で、英語以外の言語の問題を作成する側は難易度をあげて英語の平均点に近づけようとする。そんなわけで英語以外の外国語はものすごく難易度の高い問題になっています。それなのに平均点だけを見て「ずるい」などという人がいる。】

私は、幼稚園から小学4年までの間の期間を海外で過ごしていました。あちらの学校では英語での教育、家の中では日本語を使っていました。日本の学校に編入してからは、国語の授業、主に漢字に関してとても苦労したと思います。漢字に関して、あちらで生活する中で、使う事がなかったからかなぁと思っています。そのためか、現在でも少々、漢字が思い浮かばなくて苦労する事があり、国語の授業には苦手意識があります。（本を読む事は小さい頃から好きだったので、漢字のヨミは得意だと思っています。）今では、スマートフォンを携帯しているので、予測変換機能を活用したり、メモを取る際にはカタカナで書き取るようにしています。

日本語の文字表記について、バイト先の中国人留学生の子がカタカナは難しいと言っていました。また、私は韓国のアイドルが好きなのですが、その人もカタカナが難しいと言っていました。カタカナのどのような点に難しさを覚えるかとても気になりました。ひらがなの区別とかかなと思いました。…後略…

【あべのコメント：理由は3つくらいあるでしょう。漢語（中国語）では外来語を多用しないので、漢語話者が日本語を読んでいるとカタカナを見つけて「また外来語！」と感ずるのです。カタカナ＝外来語＝漢字表記のことじゃない、だから難しいということです。あとは、ひらがなとカタカナの2種類を使用する意味がわからない、「カタカナいらんじゃん！」ということです。あと、英語などからの外来語でもどのような発音でとりいれているかは言語ごとにちがいますよね。「○○が、なんでこんな発音になってるの？」という。】

…テスト珍解答の本に「種子島に鉄砲を伝えたのは何人か？」正：ポルトガル人を“3人”と解答したのが載っていたのを思い出しました。日本人でも間違えるんですね。／合理的配慮について、話がそれるのだが、国会議員に2人の身体障害者がえらばれた時に、スロープやらなんやらがついたが、それについて、自分達でやれよ！とかいう声をあげる人も一定数いたという事を思い出した。特別な、不平等な配慮だと思っているのかもしれない。

【あべのコメント：テスト問題をつくるのは、けっこうむずかしいんですね。ことばって、あいまいだから。回答をみてはじめて、想定していた意味とはちがう解釈ができることに気づかされるという。でも、多くの場合は、「○○って意味にきまってるだろ！」とって誤解した側を一方向的に非難してしまう。】

…私の実家の近くに住む、ブラジル出身の家族は、「親せきが皆、中学とか行っていないから、行かないでも大丈夫だと思った」と言っていました。そもその学校というものに対する考えや文化がちがうことも不就学につながるのだと思いました。／あべ先生や東弘子先生の授業で、かすたねっとを知り、教員の母に教えました。現場の先生への認知度が低いみたいですね…。母の学校では、多くの先生方が使いはじめたそうです。

———

どの授業で聞いたのか忘れましたが、「日本語を聞いたり話したりするのは得意でも、書いたり文字を読むといったことは苦手なバイリンガルの子は、一見問題なく日常生活が送れているようにも見えるため『この子は日本語を完ぺきに使いこなしている』と周囲から認識され、たとえ授業についていけなくてもサポートがおろそかになることがある」と聞いたことがあります。そういった子をださないためにも客観的にその子の言語習得がどれくらい進んでいるのかを見るのが、学力という問題を解決するのに重要なのかなと思います。

【あべのコメント：バイリンガルのこどもにかぎらず、学校での学習につまづいているこどもにたいする態度は2種類あるといえます。ひとつは、「この子はおちつきがなくて、教室をうるちよるするし、こまったな」というもの。もうひとつは、「勉強はあまりできないけど、しずかにすすべている」というもの。学習支援員などが教室にいる場合でも、うるちよるしてしまうこどもへの対応というニュアンスがあったりするようです。学校がもうすこし個々に対応できる学習空間になればいいのですけどね。】

———

学生への質問：

以下の点について、経験したことがある人はかんたんにそのときのことを書いてください。

- ・中学校の修学旅行などで、観光地で「外国人」に「英語で話しかけてみよう」「英語で質問してみよう」という課題をだされましたか。
- ・自分が学んでいる言語やそのバリエーションについて周囲から非難めいたことをいわれた経験はありますか。
- ・ある言語の学習者の立場から、「ネイティブ」の話しかたを否定的にとらえてしまったことはありますか。